

知を生かす大学体育 —個性輝く大学づくりのために—

萩原武久

体育科学系教授 体育センター長

法人化という見えない波が押し寄せる中で、危機感を募らせるのが、教養教育、本学で言うと共通科目である。

1991年の大学設置基準の大綱化は規制を弾力化し各大学が独自性を発揮しやすくしたが、同時に多くの大学で教養教育を支えていた一般教育科目と、それを担っていた教養部が解体され一般教育科目は多くが専門科目に取って代わった。

本学の共通科目「体育」もその例に漏れず、開学以来特徴としてきた全学生4年間必修の壁が取り払われ、多くの学群・学類が必修単位の縮小に動いたのは記憶に新しい。

体育とは何か

体育という言葉は、明治のはじめに導入された Physical Education の訳語である。体育の意義は「知育・徳育・体育」に代表されるように教育の一分野として理解され、「身体を目的とし、対象とす

る教育」として理解されてきた。

戦後はアメリカの影響を受けて、スポーツ中心の体育が導入され体育の概念も「身体の教育」から「運動による教育」へと変化し、最近では「身体的教養」と言われるような、運動の人間形成機能に光が当てられるようになっている。

小林勝法氏は、この「身体的教養」についてこう述べている。「身体の教養は、その人が運動中に意味を見つけだし、それによって自己と世界とを抜げるための道具—能力・知識・経験・認識—を身につけていることであり、身体としての自己認識や世界認識、他者理解、身体の自由の獲得などを意味している。身体の虚弱化や身体意識、現実感覚、生活実感の希薄化、人間関係形成能力の未熟という現代学生に第一に必要なのは身体の教養であると言っても過言ではない。この点からも、体育は大学教育の普遍的目的の一つである人間教育に合致しているとい

える。」

新しい時代に求められる教養とは何か

中央教育審議会の『答申』には「教養」について次のような記述が見られる。

「教養とは、個人が社会と関わり、経験を積み、体系的な知識や知恵を獲得する過程で身につける、ものの見方、考え方、価値観の総体とすることができる。教養は、人類の歴史の中で、それぞれの文化的背景を色濃く反映させながら積み重ねられ、後世へと伝えられてきた。人には、その成長段階ごとに身につけなければならない教養がある。それらを、社会での様々な経験、自己との対話を通じて一つ一つ身につけ、それぞれの内面に自分の生きる座標軸、すなわち行動の基準とそれを支える価値観を構築していかなければならない。教養は、知的な側面のみならず、規範意識と倫理性、感性と美意識、主体的に行動する力、バランス感覚、体力や精神力などを含めた総体的な概念として捉えるべきものである。」

さらに答申は次のように続いている。

21世紀を迎え、変化の激しい流動的な社会に生きる我々にとって必要な資質や能力は何か、これを培うための教育はどうかあるべきか、こうした観点から、新し

い時代に求められる教育について検討を行い、その要素として5点を挙げたが、その中の2点の記述を見てみる。

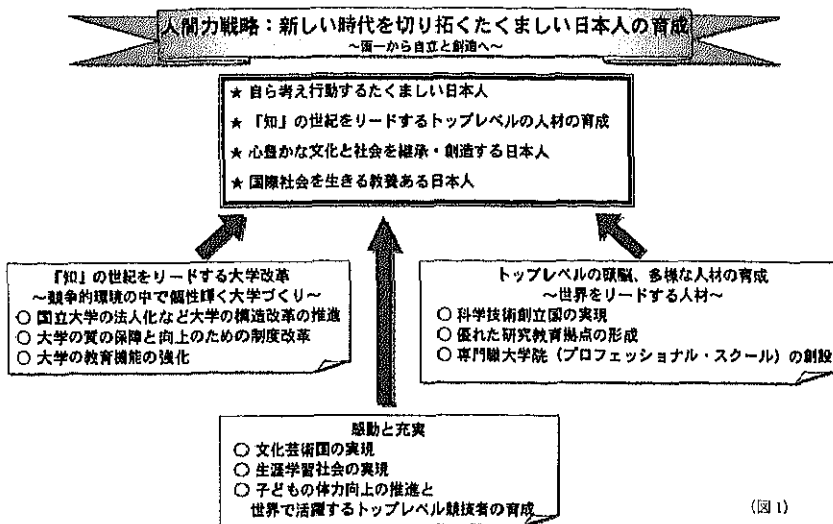
(1) 新しい時代を生きるための教養として、社会との関わりの中で自己を位置づけ律していく力や、自ら社会秩序を作り出していく力が不可欠である。主体性ある人間として向上心や志を持って生き、よりよい新しい時代の創造に向かって行動することができる力、他者の立場に立って考えることのできる想像力がこれからの教養の重要な要素である。

(2) 教養を形成する上で、礼儀・作法をはじめとして型から入ることによって、身体的感覚として身につけられる「修養的教養」は重要な意義を持っている。このためにも、私たちの思考や行動の規範となり、教養の基盤を形成している我が国の生活文化や伝統文化の価値を改めて見直す必要がある。

また、「どのように教養を培っていくか」についての記述があり、「教養の涵養は個人にとって生涯の課題であり、教養を身につける努力はいずれの年齢や職業についてもすべての人に求められるものである。」と結んでいる。

国の人づくりビジョン

遠山文部科学大臣は、平成14年8月30



(図1)

日の経済財政諮問会議制度・政策改革集中審議において、義務教育から高等教育、生涯学習までを貫く人材育成の基本的ビジョンとして「人間力戦略ビジョン・新しい時代を切り拓くたくましい日本人の育成・画一から自立と創造へ」を発表した。図1は大学に関連する内容で、大学の役割はまず世界をリードする人材を育成することであり、そのための大学改革の推進を図ること。また、文化、芸術、スポーツ、健康、国際性等に幅広く目を向けたのが「感動と充実」の柱である。

この人間力戦略ビジョンと前後して、「中央教育審議会」は教育基本法の見直

しを求めた中間報告を発表した。

図2によると、教育の基本理念として「伝統、文化の尊重、国や郷土を愛する心」といった日本人としてのアイデンティティーや、社会の形成に主体的にかかわる「新たな公共」の意識の重要性を強調している。

これらのことは、一体、何を意味しているのだろうか。「個人の尊厳」や「人格の完成」などの理念は、本来普遍的なものである筈なのに、それが普遍でなくなった所に大きな問題が介在していると考えられはしないか。

教育基本法

教育の基本理念

「伝統、文化の尊重、国や郷土を愛する心といった日本人としてのアイデンティティー」
 「国家社会の形成に主体的にかかわる新たな公共の意識の重要性」

個人の能力の伸長、創造性の涵養、
 個人の自己実現、努力や向上心

「新たな公共」の創造に貢献する意識
 公共心、道徳心、倫理観、自律心、規範意識

国際性と日本人としてのアイデンティティー
 (伝統、文化の尊重、郷土や国を愛する心)

生涯学習の理念

自然とともに人は生きていることを
 理解し感じる力を培う

時代の変化や社会を取り巻く環境の変化に
 対応できる能力の習得

学校教育で的確な職業観の育成を図る

(図2)

希望の光—体育

新構想を標榜した筑波大学もすでに30年経つ。「大学体育」のあり方も単に体力、健康の側面や生涯スポーツ教育といった側面だけで論じられてはならない。本稿も多くを「教養論」について割いてきたが、このことは、教養を解説している前述の文章の中に、体育と密接につながるキーワードが数多く内在していることを意味している。三木清は、教養を「趣味的教養」「古典的教養」「科学的教養」の3つの側面があるとしているが、私はこれに「身体的教養」を加えるべきだと考えている。

大学も2人に1人が進学する時代を迎え、大学の大衆化が一層加速している。「できる生徒」だけが進学した時代は終

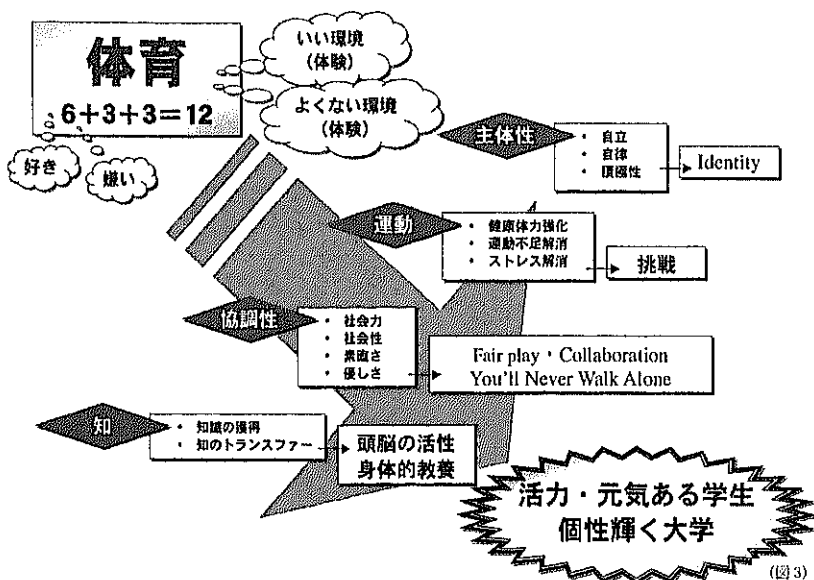
わり、学生像も様変わりしている。昨今、学生の「知」の低下が叫ばれているが、低下しているのは、「知」のレベルだけであろうか。「人間力」とでも表現できるような、人としての総合力が低下していると言っても過言ではないだろう。

未来へ—筑波大学の「体育」

図3は筑波大学体育センターが30年間に渡って実践してきたものを私案として図示し、体育センター会議でも公表したものである。

筑波大学の体育は、「主体性」「運動」「協調性」「知」の4つの柱で構成されている。

まず、第1の柱である「主体性」につ



いてであるが、小、中、高、12年間の「体育」の授業で、最も疎外されてきた部分ではないと思われる。

「体育」はいつも強制で、先生に言われたことだけをやるか、何も言われないうで勝手にやる放任かのいずれかのタイプが圧倒的に多く、いい体験や経験をしている人間が少ないのには胸が痛む思いである。

そこで大学体育の第一歩は、「強制」にピリオドを打ち、どのような種目をやるにせよ全てが自分自身のためであることを認識し、主体性を持って積極的に参加することにより、「自立」への道も早

まるだろうし「自律心」も高まる。結果として「公」の意識や「愛国心」とまではいかなくとも、「大学」へのアイデンティティーの獲得にも寄与できるのではないのだろうか。

第2の柱は「運動」である。体育は実際の運動を通してはじめてなし得るものであるが、他の領域の教員の多くは、体育は身体を動かし汗をかくことだけだと思いつている節がある。実は、運動は若いエネルギーを昇華するだけでもいいと思うが、果たしてそれだけだろうか。

体育の行う実技の意義は、痛みや恐さ、そして、何よりも失敗や挫折、敗北

の体験ができ、それらを乗り越えるための「挑戦」ができることである。そして、人は「挑戦」と「成功」の課程で成長し変貌を遂げるのではないのか。

第3の柱は、「協調性」である。

個人スポーツであれ集団スポーツであれ、自然を相手にするスポーツであれ、他者に対する愛着、関心、信頼等がなければスポーツとして成立しない。近年の学生の気質の特徴が、人間関係の構築が下手とかコミュニケーション能力が不足しているといわれるが、これらの能力の改善や資質の向上に、体育は一役も二役も貢献することができる筈である。

最後が第4の柱「知」である。有り余る知識を生かすためにも幅広い人間性で見識がなければ、せつかくの知識も研究も生かされることはない。

本学の「体育」は豊富な施設を活用し、他大学に類をみないカリキュラムで、教育COEでも評価されるような実技と総合科目等の授業を、情熱溢れる専門性豊かな教官が担当している。

個性輝く大学には、活力ある、元気澁瀨とした学生の存在を抜きにして語ることはできない。

大学と大学教員の主要な責任は、しっかり研究し学生を教育することにある。専門教育重視も、大学院教育重視にも異

論はないが、要は各々の領域で学生を育てること、人づくりにどう寄与するかが問題である。その点において、「体育」は他の分野に優るとも劣ることなく貢献できると確信している。

大学の「知」を生かすためにも、そして、何よりも「人の心」を一つにし「一体感」を共有することができる、「体育」「スポーツ」のもつ副次的効果を再認識し、それを生かすべきだと考える。

(はぎわらたけひさ コーチング学)